

今年もまた、時の糸車は、十二の月を紡ぎ終えようとしている。

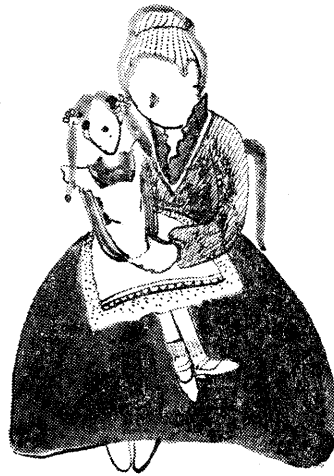
「この一年、子どもたちはどう変わったろうか」。保育者のまなざしは、慌しく、一人々々の上に注がれるだろう。そして、「あの子は、あそこが

変りかけている」「この子は、これが出来かけている」と、

子どもらのあちこちに幾つかの「徴」を見出し、幾らか安堵したりする。それに学校暦は三月で区切られる。何しろ、まだ、三ヶ月残っているのだから……。考えてみれば、保育というこの営みは、かなり、楽天的な気分を支えられているものようだ。

子どもらの上に見出される「変化の徴」は、一見、取るに足りない、極く些細なものが多い。然し、そんなささやか

な変化こそ、保育者の生き甲斐となり、明日を支えるエネルギーとなる。天下国家とはほど遠く、地球の運命ともかわりなく見える「いと小さき営み」、それが保育なのだ。



然し、「神は、細部にこそ宿り給う」ではないか。

時間は、しばしば、「糸車」のメタファでとらえられ、その経過は、「紡ぐ」

と呼び慣らされてきている。しかも、その紡ぎ手は、大凡、女性であった。混沌とした毛の塊を気長に糸車にかけて、長くしなやかな糸に紡ぎ上げる。そんな行為は、猛々しく力ある男性のものではない。単調に見えるその動作に心穏かに耐え、僅かずつの糸のたまりをいとおしむその強さは、野を駆け、獣を狩ることの対極に位置して、女性の分け持つべき重いつとめと見なされたのであろう。

「ゆっくりと」「くり返して」「ささやかな蓄積を」、これが紡ぎ手に寄せられる期待であった。

保育者もまた、幼い人の「成長する時」の糸車を、「ゆっくりと」気長に廻し続けねばならない。それは、訪れる新しい年にも、変りなく「くり返される」営みである。そして、その「ささやかな蓄積を」愛でるまなざしが、やがて、新しい人間の誕生に立ち会う光栄に浴すことにもなるのだから……。

(H)